

木の葉の小判

菊池寛



イラスト／池内

舞

村むらのとうげ道みちに、近ちかごろいたずらなきつねがでて、とおりがかりの人を、ばかすといううわさがたちました。

ある日、喜平きへいというじいさんが、そのとうげをこえて、となり村むらまで用ようをたしにゆくことになりました。その日はたいへんさむい日でしたので、喜平きへいじいさんははんでんの下に、あたたかいきつねの毛皮けがわをきこんでかけました。

ちようどとうげの上までくると、道みちばたに、となり村むらの仙太せんたと伍助ごすけという、二人のかごやが、かごをおろしてやすんでいました。

「やあ、喜平きへいさん。どこへゆきなさる。」

「ちよつと、しんるいのうちまで……」

「そうですか。このあたりには、わるいきつねがでるそうだから、気きをつけていておいで。」

「はい、ありがとう。」

喜平<sup>きへい</sup>じいさんはそのまま、さかをおりていきました。

二人は何<sup>なん</sup>の気<sup>き</sup>なしに、そのうしろすがたをみおくっていましたが、思<sup>おも</sup>わず

「あつ。」

と小ごえでさげびました。喜平<sup>きへい</sup>じいさんのはんてんの下<sup>か</sup>から、ふといきつねのしつぽが、だらりと下<sup>さ</sup>がつているではありませんか。

「ふむ、さてはいたずらきつねめが、喜平<sup>きへい</sup>じいさんにばけて、おれたちをばかそうとしているんだな。」

「そうだ。いいことをかんがえたぞ。わざとだまされたふりをして、あのきつねをかごにのせて、



いけどりにしてやろうじゃないか」

二人はいそいで、喜平きへいじいさんのあとをおいかけました。

「おい、じいさん。おれたちもどうせもどり道みちだから、かごにのっておいで、な  
あに、おかねなどはいくらでもいいよ。」

二人はこういって、あまりのりたがらない喜平きへいじいさんを、むりにかごへのせ  
ました。ところが、喜平きへいじいさんがかごにのるが早いか、二人はいきなり細ほそいひ  
もをだして、喜平きへいじいさんを、かごのはしらにぐるぐるどくりつけてしまいま  
した。

「あいたたた、なにをするんだ。」

「ははは、ばかぎつねめ、いくら喜平きへいじいさんにばけたつもりでも、それ、その  
とおりにしつぽがで出ているじゃないか。さあ、早く正体しょうたいをあらわせ。」

「じょうだんじゃない。おれはほんとうの喜平だよ。」

「まだあんなごうじょうをいつている、それ、松葉でいぶして正体をださせよう。」

二人は火をもし、青松葉をとってきてくべ、もうもうとあがるけむりを、どんどん喜平じいさんの顔に、ふきつけます。

「ごほんごほん。」

喜平じいさんは、とても苦しくてたまりません。

「こりやたまらん、うっかりしていると、いぶしころされてしまう、いつそのこと、ほんとのきつねだといって、二人をだましてやろう。」

と思いましたが、

「ああもし仙太さんに伍助さん。わしがわるかった、わしはほんとうはきつねなのじゃ、どうかたすけてください。たすけてくださいれば、おれいに小判（おかね）

をあげますよ。」

「なに、小判こばんをくれるって、ほんとか。」

「ほんとですとも、そこらにおちている、木この葉はをあつめておいでなさい。わしがそれを、小判こばんにしてあげるから……」

二人は「しめた。」とばかり大喜おおよろこびで、木この葉はをあつめてきました。喜平きへいじいさんはその木この葉はにいちいち、「ふつ、ふつ。」と息いきをふきかけて、

「さあ、これで小判こばんになりました。」

「何だ、こりややつぱり木この葉はじゃないか。」

「いや、あなたがたが見みれば木この葉はですが、村むらのものには、それがりつぱな小判こばんに見みえるんですよ。うそだと思おもうなら、ふもとの茶店ちやみせへもって行って、つかってごらんさい。何でもあなたがたのたべたいものがたべられますよ。」

二人はよろこんで喜平きへいじいさんのひもをほどいてやり、いそいで村むらへかけおりてゆき、茶店ちやみせへとびこんで、おいしいごちそうを、おなかいっぱいたべました。そして仙太せんたがはらがけから、さつきの木の葉はを一まいだして、

「じいさんや、小判こばんだよ、おつりはいらさないよ。」

といって、さつさと出ていこうとしました。茶店ちやみせ

のじいさんは、おどろいて、

「おっとまった、何なんだい、この葉はつばは……」

「葉はつばじゃない小判こばんだよ。」

「ばかな、こんな小判こばんがあるものか。」

じいさんがその葉はつばを、いろいろの中へなげこむと、たちまち、めらめらともえてしまいました。



「さてはさっきのきつねめ、うまくわれわれをだましやがったな。」

仙太と伍助はとてくやしかりましたが、どうしようもありません。とうとう

たべただけのおかねをはらって、すごすごとかえっていきました。

そのころ喜平じいさんは、ぶじにしんるいの家について、とうげのできごとを話しながら、みんなで大笑いをしていました。

このお話は、はじめは昭和十二年（一九三七年）

十月に「幼年倶楽部」というぎつしに発表され

ました。今では、『菊池寛全集 補巻第四』

（武蔵野書房）という本の中にのっています。